



3.11から2年 福島と多摩をつないで

2013 年 2月16日(土) 武蔵野芸能劇場

それでも、牛と生きる

第1部 警戒区域で 被曝した400頭の牛を 飼い続ける理由^{わけ}

福島県浪江町『希望の牧場・ふくしま』代表
吉沢正巳さんのお話

第2部 つながろう、広げよう！活動報告&交流

こどもみらい測定所 …………… 石丸偉丈さん
福島原発訴訟団・関東 …………… 白崎朝子さん、西園寺みきこさん
つながろう！放射能から避難したママネット@東京 …… 増子理香さん
映画「福島 六ヶ所 未来への伝言」 製作スタッフ…… 島京子さん

あれから2年が経ちました。福島第一原発事故後の日本に住む私たちは、それ以前とは違う日々を送っています。

少なからず環境問題に取り組んできた私たちですが、増え続ける放射性廃棄物や、労働被曝の問題などをそのままに、いつの間にか日本中に54基もの原発を造らせてしまいました。

原発事故による放射能汚染で故郷を追われ、仕事を失い、家族や地域が分断されて、失望や深い悲しみを抱えて生きる福島の人々の存在を忘れたかのように、政府は「安全な原発を作る」「安全を確認して再稼動する」と国民の民意に反した発言を繰り返しています。

ごみ・環境ビジョン21は、苦悩の中にある福島の人々を忘れず、怒りを共有し、つながりあい、原発のない未来を実現させていくために、2月16日、「希望の牧場・ふくしま」代表・吉沢正巳さんの講演会を開催しました。

当日は、会場の定員を上回る200名もの人が集い、吉沢さんの渾身の訴えに、共感と連帯の輪が広がって、会場全体が一つになりました。全てのいのち、自然は原発とは共存できないこと、福島の無念の気持ちを、東京にいる私たちも微力ですが伝えていかなくては、と改めて思いました。

最後に、会場カンパ128,665円と、ロビーで販売した「鎮魂と抗い」(山本宗輔フォトボルタージュ)の売上から7,000円を、希望の牧場に寄付することができました。お手伝いいただいた会員の皆さん、希望の牧場サポーターの皆さん、ご協力ありがとうございました！

『希望の牧場・ふくしま』代表

吉沢正巳さんの 講演を聴いて

講演を聴き続けるうちに
涙がポタポタと
頬に落ちた

彼の講演を聞き続けるうちに、涙がポタポタと頬に落ちた。涙をとめる気持ちはあったが、抑えがきかなかった。日本に生まれて不幸だという思いが腹の底からわいた。

講演が終わったあと、隣の女性から「あなたは福島県の人ですか」と尋ねられ、「いいえ、東京に住んでいます」と答えた。オッサンがだれはばかることなく、涙をハンカチでぬぐっている

姿を横目で見て、心の中で「きっと福島出身者じゃないか」と思ったのだろう。私の答えにその女性は少し驚いたような顔をしていた。でも、あなただって、涙を流していたではないか――。

「決死救命」と
手書きされた木片が
強烈なメッセージを放つ

冒頭から湿っぽい話だが、2月16日土曜日に三鷹駅北口の武蔵野芸能劇場で開かれた「3・11から2年 福島と多摩をつないで」と題した集会（主催：NPO法人 ごみ・環境ビジョン21）に行ってきた。

第1部に登場した福島県浪江町「希望の牧場・ふくしま」代表の吉沢正巳さん（58）の話に心打たれたのだ。体験している人だ

けが言える「心の叫び」を肌で感じた。言葉は拙くても聴衆の胸にズシンと響く。

演壇に立つ吉沢さんの脇には「希望の牧場ふくしま」と記されたのぼり旗が立ち、その前には「決死救命」と手書きされた縦長の木片が置かれる。彼の決意のほどが強烈に伝わってくる。

千葉県四街道市から浪江町に移住してきた吉沢さんは、大事故を起こしたあの東電福島第一原発から



写真：橋詰雅博

14^{キロ}の地点にある約30ヘクタールの牧場で、今も約350頭の牛を飼いつけている。立ち入りが制限されている警戒区域内で、被曝した牛に水と餌をやっている。「殺処分しろ」という国の命令に抗い、牛飼いの生活を続けているのだ。売ることができなくなった牛をなぜ生かしておくのだろうか。

「とうとう来るべきものが来た」と県警通信部隊が言い残す

その理由を語る前に、吉沢さんは当時の原発事故をこう振り返った。

「3月12日の早朝、福島県警の通信部隊が“場所を貸してほしい”とやってきた。牧場は小高い場所にあり、第一原発の様子を撮影するヘリが送ってくる映像をパラボラアンテナで受ける中継基地に適していた。

ところがその日の午後1号機で水素爆発が発生。部隊には撤退命令が出て、僕に“とうとう来るべきものが来た。国は情報を隠している。ここにいない方がいい”と言い残して引き上げていきました。国が隠したのは後で判明する原子炉のメルトダウンとSPEEDIの情報でした。

だが、僕は“牛がいるから牧場を離れない”と決めていた。牛に水と餌をやるため牧場に出入り

するたびに、検問の警察官から“線量がふだんの1000倍にも上がっている。出入りしちゃダメだ”と止められました。

16日に自衛隊のヘリが放水しているサマを、牧場内の自宅ベランダから双眼鏡で見ていたのですが、真っ白い噴煙が排気塔の高さまで上がりました。20日には出荷先に“放射能汚染された牛をもってくるな”と言われた東電が撤退、牧場はパー、通常の1000倍を超える放射線量…“浪江町はもはやこれまで”と思った」

軽トラックで上京
抗議のため
東電本社に乗り込む

吉沢さんのすごいところはこの先からだ。

東京の東電本社に乗り込んで、牛が死んでしまう、なんとかしろと抗議することを決断。スピーカーを載せた軽ワゴン車に牧場の廃車から抜き取ったガソリンを入れた。そして出発前に遺言の意味をこめて餌を収めるタンクにスプレーで「原発爆発14Km地点 決死救命、団結！」と書いた。この「決死救命、団結！」は吉沢さんのこの先の活動スローガンになった。

吉沢さんはかつて、東電が浪江町に建設しようとしていた原発の反対運動の先頭に立ち、反原発を訴えて県議選に出馬するなど旺盛な反骨精神と馬力がある。こういう人だから東電への猛烈な抗議を思いつき、すぐに実行に移せるのだろう。18日上京し、東電本社に向かう。

「玄関前にいたガードマンに“福島県浪江町から

きた、牛が死ぬ、取り継いでほしい”と泣きながら訴えた。なぜか許可が下りて、応接室で総務主任と二人の刑事と会った。

主任に“制御できないものをつくったお前らのせいで、牛が死ぬ。絶対、損害賠償請求する裁判を起こす。なぜ福島から東電は逃げた。自衛隊と一緒に現場で放水活動をしろ”と要求。しまいに主任は泣き出した」(吉沢さん)

地震で家を壊され
津波で流され
放射能汚染で追い出される

吉沢さんの父親は、満蒙開拓移民として旧満州（現在の中国東北部）に入植した。

1931年の満州事変以降、農業従事者を中心に日本人移民の入植が本格化した。吉沢さんの父親もその一人だったわけだ。ところが、45年8月のソ連参戦をきっかけに、日本人移民が現地住民から襲撃され、大勢の移民の方たちが亡くなった。

満蒙開拓移民団を吉沢さんは「邪魔なものを追出す国の『棄民政策』、『棄畜政策』だ」と指摘する。

「歴史は繰り返す。東日本大震災では地震で家を壊され、津波で何もかも流され、そして原発事故による放射能汚染で人々は追い出された。たった2年で僕たちは心折れ、生きる意味を失ってしまった。

“チェルノブイリになった浪江町”に果たしてどれほどの住民が戻ってくるか。原発事故前は人口2万1000人だったが、その10分1が戻るかどうかともわからない。役場のアンケート調査では“もう生きる意味がない”と回答した人が多くいて、“死にたい”と答えた人もいた。

国や東電は最低のお金を支払い済ませようとしている。損害賠償金の交渉が進まないのは、相手が根負けするのを待っているのだ。国は被災者たちを見捨てるような扱い方をしている。かつての満蒙開拓移民と同じように棄民扱いするつもりだ」(吉沢さん)

実際、東電は損害賠償の打ち切りを急いでいる。たとえば福島県伊達市住民への精神的損害賠償を3月末で打ち切る方針と発表した。さらに数兆円が投入されるという放射能除染事業にしても、ゼネ



コンが一手に引き受け、独占状態。どのくらい効果があるのかわからないとする専門家もいて、それならばその金を被災者の生活費に充てるべきだと吉沢さんは提案する。

また、福島県の子どもに甲状腺がんが見つかったが、被曝が原因とは考えにくいと県立病院側は主張する。吉沢さんが言う「棄民政策」が着々と進行しているように見える。

「棄民政策」への
抵抗のシンボルが
被曝した牛たちだ

吉沢さんはこうした「棄民政策」に真っ向から対決するシンボルとして被曝した牛たちを殺処分せずに飼い続けている。

「生き残っている牛たちは原発事故の生きた標本です。国は証拠隠滅したいだろうが、被曝実態の調査・研究を通じてこの先の放射能災害の予防に役立てられる貴重な科学的

なデータが得られるし、集積もできる。

すでに大学の獣医学チームと協力し、牛の体内被曝の調査をしている。雄牛の去勢作業も行っている。頭数を増やさないために欠かせないし、生殖器官への放射能の影響調査にも役立つ。被曝した牛を飼い続けることで、原発の時代を乗り越える力が備わる。頑張れるのです。これが国や東電と闘う原動力にもなる」(吉沢さん)



写真：橋詰雅博



牛飼いの意地に根差した
抗議活動に
人生を捧げる

検査の結果、今のところ放射能によるDNA損傷はないという吉沢さんは、屋根に「東電、国は大損害をつぐなえ」と書いた看板を載せた車を運転し、原発立地自治体を回っている。

「被曝体験をしゃべり、写真を見せている。あなたたちが住む場所が“チェルノブイリになる危険性がある”と訴えている。

ドイツは脱原発に突入した。ドイツがやれてなぜ日本はできないのか。それどころか原発再稼働に逆戻りしている。日本国民の力がドイツ国民と比べて足りない。脱原発でもっと深く連携行動し、7月の参院選でその力を発揮しなければならない。本当に日本国民の良識が問われている。

東電に4万ベクレルという放射能たっぷりのキノコをお土産代わりに置いてきたこともある。もちろん食べてはいけませんと告げたが、浪江町民として東電や首相官邸前に座り込みたい。僕は独身だが、子どもや孫のためこの抗議活動に残る人生を捧げる。被曝牛に水や餌をやり、大勢の人たちが手伝ってくれる。いまは幸せを感じている。牛飼いは牛飼いの意地がある。筋金入りの意地を見せたい」(吉沢さん)

武蔵野芸能劇場3階ホールのキャパは約150席。当日は会場に入らず楽屋のモニターを見てもらった人もいたほどで、約200人が入場したという。吉沢さんが講演中にカンパ袋が会場で回された。約12万円カンパが寄せられたそうだ。

吉沢さんも、被曝牛も福島県も私たちは決して忘れないぞ!!

こどもみらい測定所 石丸偉丈さんのお話

2011年12月15日、国分寺カフェスローの入り口にあるmemoliというエコマーケット内に2台の測定器を設置し、測定所がスタートしました。

これまでに、約1800検体を測ってわかったことは、都内の土壌でセシウムが出ないことはまずない、ということです。だいたい数10～100、200ベクレル程度、東と西で数値が高いですが、国分寺市内でも、雨水が溜まるような場所で1万ベクレルの土もありました。

日本の土は粘土質が多いのでセシウムが土に吸着しやすく、野菜などの作物からは案外出ていません。検出しやすいものは、キノコ、サツマイモ、レンコン、タケノコ。梅や茶葉はだいぶ下がっています。魚ではマダラや淡水魚が出やすい。丁寧にデータを見ていくことで、福島産であっても応援していける。

ただ、汚染を心配している人が孤立している状況もあり、話せる場が必要と感じています。測定所では、イベントを開催したり相談にも応じています。

＊カフェスロー／memoli

東京都国分寺市東元町2-20-10 TEL 042-312-4414 水曜～土曜 11:30～16:30



福島原発告訴団・関東

白崎朝子さん、西園寺みきこさんのお話

福島原発事故を起こし被害を拡大した責任者たちの刑事裁判を求めるために、2012年3月16日、福島原発告訴団が結成され、6月11日には福島県民1,324人が福島地方検察庁へ第一次告訴を行いました。その後、全国から告訴人13,262人による第二次告訴を11月15日に行いました。(最終の告訴人数は14,716人)

全国10カ所の事務局のうち、私たち関東では、説明会のセッティングや事務作業など、慣れない仕事を荻窪に借りた事務所で10名の事務局で担い、約6,200人もの告訴人を集めて委任状を提出することができました。

皆さんの一人ひとりの思いや情熱で、ここまでやれたと実感しました。

「原発事故がなかったことには絶対させない、このままでは済ませさせない」という思いです。私たちは、忘れない、諦めない、言い続けていきましょう。

関東事務所は閉鎖しましたが、事務局有志が残って福島事務所とつながりながら、活動を続けています。

※最後に、署名活動の呼びかけと2月22日の福島原発告訴団による東京地検包囲行動&東電抗議行動の呼びかけが行われました。この抗議行動の様子はOurPlanet-TVのホームページで福島原発告訴団で検索すると見ることができます。



2.22の抗議行動

つながろう！

放射能から避難したママネット@東京

増子理香さんのお話



福島から避難してきた母と子のネットワークです。

私は三春町から娘を連れて避難してきて、今は西東京市にいます。家は黒毛和牛の肥育農家でした。事故後、適切な情報がなく、刈った草を食べさせた子牛が死んでしまったんです。即死のような状態でした。娘は4月に小学校に入学予定でしたが、校庭が2.2マイクロシーベルトあり、悩んだ末に避難してきました。

避難して孤立している母子でつながりたい、と活動を始め、これまで「福島避難者健康相談会」を3回実施しました。また今年の夏に行きます。子どもたちの健康状況は、今のところ特段あわてる状況はない、と「被曝から子どもを守る全国小児科医ネットワーク」の先生から伺っています。が、これから引き続き心電図や血液、尿検査など検査を継続していくことが大事と考えています。

それから、ささやかでも福島にいる子供たちの保養活動も行っています。避難している子どもと、その友人の福島にいる子どもと一緒に遊べる場にしていきたい。バス代などに費用がかかるので、マスクと巾着のセットを手作りして、福島マスク支援プロジェクトで販売しています。

また、原発被災者支援法がなかなか進まないの、市民会議を作り、法律を動かしていく活動もしています。これは福島の問題ではなく全国の問題と考えています。

映画「福島 六ヶ所 未来への伝言」製作スタッフ 島 京子さんのお話

この映画はフォトジャーナリスト島田恵の初監督作品です。島田は東京青梅市在住ですが、26年前、核燃再処理施設反対運動が激しく行われていた六ヶ所村に入り、12年間も生活者としてそこに住みながら、農民漁民の姿をスチールカメラで撮り続けてきました。

莫大な税金を投入して建設された再処理工場は、事故続きで操業予定が延期されています。これまでの貴重な記録を映画にしようと協力者が集まり、クランクインしてすぐに3・11がありました。福島を入れなければ、とさらに200時間以上撮影してようやく完成し、2月9日に完成披露上映会を行うことができました。

各地で自主上映会があります。ホームページでご確認の上、ぜひ足をお運びください。また、皆さんの地域で上映会を企画いただくと嬉しく思います。

◆今後の上映予定（3月20日現在）

- 4月6日（土） 東京都 国分寺本多公民館 042-332-2647（島）
- 4月6日（土） 愛知県名古屋ウィルあいち大会議 070-5032-3359（岩城）
- 4月13日（土） 岩手県 盛岡駅前 アイーナ8階会議室
- 4月19日（金） 千葉県 松戸市民劇場ホール
- 4月20日（土）～4月26日（金） 青森県 フォーラム八戸
- 4月21日（日） 大阪 エルおおさか大ホール 「ノーモア・ヒパクシャ関西のつどい」
- 5月12日（日） 愛知県豊橋市
- 5月25日（土） 東京都日野市 七生公会堂 042-592-3806（古荘）
- 6月14日（金） 千葉県美浜文化ホール 音楽ホール
- 5月29日（土） 東京都 カタログハウス（新宿）



科学技術庁長官に抗議する六ヶ所村のカッチャたち（1986年11月 HPより）